資料５

矢作川の河川環境の方向性について

2013.11.26

１．本川モデル７回で共有できたこと

① 多様な物理環境と生息環境を目指すこと。

② 手段として、低水路幅の取り扱いが一つのキーワードになること。

③ 動植物にとって、魚にとって、利用者（人）にとってなどの観点でブレークダウンして整理する必要があること。

④ 上流の境界条件がわかれば、短期的な河床変動予測は可能であること。（河床変動の長期的な予測は困難であること。）

２．情報共有が必要なこと（まだわかっていないこと）

① 越戸ダムから流下してくる土砂の情報（供給量、粒度分布など）
⇒土砂管理検討委員会に依頼

② 土砂管理検討委員会で越戸ダム下流の環境をどう考えているかの情報。
⇒土砂管理検討委員会に依頼

③ 越戸ダムの堆積土砂の情報（粒度分布など）
⇒中部電力、国交省・愛知県に依頼（それでも難しい場合に WG で検討）

④ 国交省と愛知県が連携した継続的な調査の実施（河道横断測量、河床材料など）
⇒国交省と愛知県に依頼

⑤ 低水路幅拡幅による河道の応答

３．本川モデル７回で出された提案

① 瀬・淵とワンドを組み合わせて考えると、多様な環境になるのでは。

② 河道掘削を工夫すれば、河床変動を促せるのでは。

③ 河道掘削の事業があれば、WG との共同研究テーマになる。